〈付〉和魂漢才の英知

日本文化は、およそ飛鳥・奈良時代から平安初期まで唐風全盛であったが、やがて九世紀末、遣唐使の中止された菅原道真のころ、〝国風文化〟の成立をみた、とよくいわれる。それはどういう変化であったのか、少し具体的に考えてみよう。

たとえば、大系日本の歴史3『古代国家の歩み』には、「国風文化の胎動」という項に、「梅から桜へ」の小見出しで、つぎのようにしるされている。

『万葉集』では、サクラの歌四十四首に対して、ウメの歌は百十八首と三倍近くある。……平安時代になると、ウメとサクラの地位はゆるやかに逆転していく。……『古今集』には、ウメの歌二十九首に対して、サクラの歌は五十三首が収められ、ウメとサクラの比は逆転する。……

これだけをみると、見事な変化の説明であるように思われる。しかしながら、はた

して奈良時代にはウメ（中国産）好みであった日本人の多くが、やがて平安時代になるとサクラ（日本産）好きに変わったのであろうか。ましてそれゆえに、奈良時代の唐風文化が平安時代には国風文化になったといえるであろうか。

そこで、植物学者の中尾佐助氏が著された『花と木の文化史』（岩波新書）などを参考にして、この論拠を調べ直してみよう。まず奈良朝の末ごろ成立した『万葉集』所収約四千五百首に登場する植物は、萩百三十八、梅百十八、橘六十六、桜四十二、柳三十九首の順になる。中国伝来の梅や橘が多いことは確かであるが、それ以上に、日本原産の萩がトップを占め、また桜も柳より多い。したがって、いちがいに万葉歌人を唐風好みとみなすことはできないように思われる。

一方、平安朝に編まれた勅撰・私撰の和歌集をみると、春には、桜についで梅の歌も多く、秋には、萩より菊が断然多い。この菊は中国原産で、『万葉集』に一首もみえないから、奈良末か平安初めに、遣唐使等が請来したのではないかと考えられている。だから、平安朝の歌人たちは、従来以上に国産の桜を愛でる傾向が強くなったにせよ、同時に外来の梅や菊を好み、花の姿の美しさや香りの良さを愛でる風習も盛んになったとみてよいであろう。

ちなみに、ウメ ume という名辞は、もともと日本になく、梅の呉音ムァイ muAi に

由来する。これは、ウマ uma が馬の漢音マ ma に接頭母音ウをつけたのと同様、漢字音が国訓化した一例にほかならない。また、キク kiku は、菊の唐音キュック kiuk に近い漢字音が、そのまま通用したものと考えられている（森博達氏による）。これらの例は、むしろ唐文化の直伝流布といえるかもしれない。

では、より具体的に、平安前期の文人官吏として名高い菅原道真は、花木に対してどのような関心をもっていたかを調べてみよう。彼は『菅家文草』『菅家後集』に五百あまりの漢詩を収めているが、そこに詠みこまれている植物で、もっとも多いのは菊と梅であって、桜ではない。

たとえば、すでに十一歳の時の五言絶句が、「月夜見二梅花一」（月耀如二晴雪一、梅花、似二照星一……）であり、同じく十六歳の時の詩が「残菊詩」（……暮陰芳草歇、残色菊花周……）である。

また、最晩年、流謫地の大宰府で作った約四十首のなかにも、「九月九日……菊酒為レ誰調……」「梅花……人是同人梅異レ樹、知二花独笑一我多レ悲」「種レ菊……為三是花時供二世尊一……」「秋晩題二白菊一……残菊白花雪不レ如……」「風雨……偏惜二菊花残一……」「九月尽……黄菊残花白髪頭」「謫居春雪、盈レ城溢レ郭幾梅花、猶是風光早歳華……」と、菊や梅の花に切なる思いを託している。

これらをみると、道真のような平安前期の宮廷貴族たちが、いかに春の梅、秋の菊を愛好していたかがよくわかる。もちろん、春には桜を詠んだ詩も多いが、たとえば寛平七年（八九五、道真五十一歳）の「惜二桜花一応製一首」の詩序には、「人皆見レ花不レ見二松竹一、臣願我君兼惜二松竹一」とあり、人びとは桜花の「紅艶」と「薫香」をちやほやするが、我が君には「守節・貞心」のシンボルともいうべき常緑・不折の松と竹にも心を向けていただきたいと詠じている。

今なお菅公・天神さまと仰がれる道真は、遣唐使の停止を建議したことなどにより、日本文化の国風化を促進した代表的人物とみられている。それは大筋まさにそのとおりであるが、そうかといって彼は唐風文化を軽視したり排除するどころか、むしろ積極的に活用し発展させた、スケールの大きい文人官吏であったことを忘れてはならない。それゆえに、後世道真に仮託して作られた『菅家遺誡』にみえるような「和魂漢才」の人と称えられるにいたったのであろう。

ところで、ふたたび前掲の『古代国家の歩み』にもどると、「ウメからサクラへ」の推移を象徴するのは、内裏の南殿（紫宸殿）の前に植えられていた梅と橘のうち、「承和年間ころ梅がサクラに植えかえられたことである」としるされている。つまり、外来の梅から国産の桜へと変わったことが「国風文化の成立」を象徴してい

る、というわけである。

しかし、鎌倉初期に順徳天皇の著された『禁秘御抄』をみても、平安中期ころ紫宸殿の北西の清涼殿や仁寿殿の東北庭などには、依然として紅梅が栽えられている。また、『古今著聞集』によれば、摂政の藤原頼通が「春はさくらをもて第一とす。秋は菊をもて第一とす」と推したのに対して、大納言の藤原公任は「春のあけぼのに、紅梅の艶なるいろすてられがたし」とのべている。

つまり、平安以来、京都御所では、春に梅と桜など、秋に萩と菊などがいろいろ咲き香り、王朝びとをたのしませてきたのである。紫宸殿の南庭にしても、左近（東）の桜とともに、右近（西）には依然として橘が植えつづけられており、むしろ国産の桜と外来の橘とが仲よく並んでいるところに、深い意味があるかと思われる。

もしこれを一般化してよいとすれば、日本における文化的な変化は、「AかBか」式の一神教的な二者択一ではない。むしろ、古い文化も大切に残しながら、新しい文化もとりいれて、両者の長所を可能なかぎり活かす、「AもBも」式の多神教的な共存習合にこそ、大きな特色として認められる。

言いかえれば、日本人は古来、いわゆる和魂漢才・和魂洋才の英知を活用することによって、文化の内容を豊かにしてきたことになる。そして、このような主体性のある柔軟性は、今後ますます本格的に進められる国際化時代にこそ不可欠の要素といえよう。

(注)　本章のうち、前半の本論は、昭和五十六年（一九八一）十一月五日、京都の霊山歴史館においておこなわれた青年大学特別講座「日本文化と教育の役割」の要旨で、日本を創る青年会議編『混迷の時代への提言』（昭和五十七年刊）所収。また後半の〈付〉は、昭和六十三年七月十六日、奈良ホテルでおこなわれた歴史研究会創立三十周年記念大会における講話の要旨で、同会編『歴史研究』第三三〇号（同年十月発行）所載。

なお、私は平成七年春から京都産業大学に新設された日本文化研究所の初代所長を仰せつかり、専任・兼務の所員と共に、日本文化の共同研究を進めている（平成十年度からの新テーマ「京都文化の国際交流史に関する基礎的研究）。毎年、前期末に研究所報「あふひ・AOI」と、後期末に「研究所紀要」を発行し、その要旨をインターネットのホームページ（http://www.Kyoto-su.ac.jp/depahtment/ksuizc）に紹介しているので、関心のある方々はご覧いただきたい。